【作品タイトル】標星（しるべぼし）

【著者名】十霧遙

【あらすじ】１９４０年代、灯火管制下の日本。女学生のナオは失恋した友人、サチを慰めるために同級生のリエ子、ミヨ子とともに自転車で星の見える丘を目指す。そこで目の当たりにしたのは、焼夷弾の幻だった。ナオは逃げようとして転んでしまうが、サチに助けられる。サチは、生きて想いを伝えることを決意する。

【特記事項】美しいものが脅威として映ってしまう戦時中の少女たちの青春を描きました。

【本編の文字数】２４１９字

空襲警報が鳴った。少女たちは驚き、校舎近くの廃屋の中に逃げ込む。音はすぐに止んだ。ナオは黒い紙の貼られた窓を少しだけ開き、明かりのない夜の町を睨み付ける。

「誤報かな。何も起きてないわ」

「ねえ、もう帰ろうよ……」

ミヨ子が震えながら、華奢なサチの腕にしがみついている。ナオは幸先の悪さを振り払うべく、大げさに両腕を広げた。

「ほら、今日はサチのために集まったのよ。にっくき恋敵、愛紗乃と清野くんを呪ってやるんだから、もっとしゃんとしてよ」

「ナオに無理矢理連れてこられたんだよ……」とぼやくミヨ子の傍らで、リエ子がもんぺのポケットから紙に包まれた何かを取り出した。

「一応、あの子の髪の毛は用意したけど。どうやって呪うつもり？」

「リエ子、そんな禍々しいものは仕舞ってちょうだい。必要なものは二つよ。自転車と、晴れた日の夜空。つまり星の力。私たち女の子は、星の加護を受けているの。四人で願えば叶わないことなんてないわ」

「そりゃまた大仰だこと。あんたの頭の中ってそんなにお花畑だったっけ」

「古き良き呪いよりも効果はあるはずよ。いい、二人とも」

ナオはリエ子とミヨ子の腕を引っ張って、声をひそめた。

「大事なのは、サチが納得してくれること。さっさと清野くんのことなんか忘れて、立ち直ってくれることよ」

「でも、二人は幼馴染みだし……簡単には忘れられないよ」

「この国のどこかにいい男が一人でも残ってりゃいいんだけどね。いい男ほどすぐに死んじゃうのよ」

「そんな希望のないこと言わないで。ねえ、サチ！　今から星の見える丘に行きましょう。空に向かってバカヤローって叫んでやるのよ。死ねでもくたばれでもいいわ。お星様はきっとあんたの言葉を聞き届けてくださる」

サチは空虚な目を揺らすことさえしなかった。無理もない。家が近所で同じ小学校に通っていた清野とサチは、学校が別々になってからも仲の良さを周囲に見せつけていた。サチが朝一番に登校しているのは清野の中学校の登校時間に合わせているからで、帰りは女学校近くの工場でガラスを磨きながら彼が通りかかるのを待った。誰が見ても仲睦まじい二人の間に割り込んできたのが、同じ組の愛紗乃だ。爽やかで少々お人好しの清野を、映

画女優ばりの妖艶な笑みでかっさらった。サチは先の休養日に神社で手をつなぎ合う彼らを目撃して以来、心を失くしてしまったのである。

「あたしに言わせりゃ、清野は被害者だよ」

リエ子がサチの肩を優しく叩く。

「愛紗乃の奴はね、人が大切にしているものを奪えることで安心を得たいだけなの。小さい奴よ。そうすることでしか自分の価値を肯定できないんだもんね」

「私も、二人はすぐに別れると思うな……」

「もう、いいの。どうせみんな、死ぬんだもの」

サチの呟きが、暗闇にこだました。その意味が肌を刺す前に、ナオは勢いよく両手を叩く。

「みんな、自転車をかっ飛ばして、丘に行くよ。大人に見つからないようにね！」

大きな車輪の自転車に乗って、四人は星の見える丘を目指した。夜目の利くナオの背中にサチを座らせ、彼女の腰に括り付けた携帯電灯の心許ない明かりを頼りにミヨ子とリエ子が続く。町は暗く、すべての営みが黒に吸い込まれていく。湿った風の気配だけが地続きの証だった。途中で仕事帰りらしい一人の大人とすれ違ったが、俯きがちなその顔はよく見えなかった。ペダルを必死に漕いで坂を上り、ようやく丘に辿り着く。

「わ、本当にきれい……」

ミヨ子に続く言葉が出ないほど、圧巻の星空だった。ナオは自転車を下り、草の上に寝転んだ。ああ、きっと花火が一瞬で散るのを惜しんだ神様が、零れ落ちた光を星にしたのだ。本当に願いは届くかもしれない。

「みんなのバカヤロー！」

「おい。それだとあたしらも含まれるでしょ」

「ものの試しよ。届いている気がしない？　ねえ、サチ」

隣に座るサチの横顔は、あまりにも白かった。物憂げな視線を空に放ったまま、一つの星を指す。

「降ってくる」

「え？」

きらきらと光る星々の中に、一際大きな銀色の星があった。それは次第に大きくなり、不自然に膨らんだ――降ってくる。星ではない脅威が。

「逃げて！　焼夷弾だ！」

一斉に、脇目も振らず走った。防空壕はどこだろう。人の流れに合流すればよいだろうが、近隣の住民でなくても入れてもらえるのか。火の手が上がったら、もう扉を開けてくれないかもしれない。

「あっ」

焦るあまり足がもつれて転ぶ。ナオは心の中で己を呪った。私がみんなを巻き込んだんだ。裁縫も奉仕も上手くできない私が、いつもヘマばかりの私が、みんなに何をしてあげられるというのだろう。お星様、死ぬのは私だけでいい。どうか、三人の命を守ってください。

「ナオ。いつもありがとう」

サチが肩を抱いてくれた。その顔には、昔のままの優しさが戻っていた。

「あなたがいるから、前を向こうとも思えるの」

「そんな。私はいいから、早く」

「ねえ……あれ、ただの星じゃない？」

ミヨ子の気の抜けた声に、上を向く。銀色の大きな星は、チカチカと夜空を照らし続けている。リエ子が大きな声で笑った。

「なんだ。瞬いているから大きさを見誤ったのね」

ナオは信じられずに、一人じっと目を凝らした。それは、ただの瞬く星だった。私たちを守ってくれたのか。苦しみとともに、すべてを飲み込んでくれたのか。この世界に、そんな奇跡があるのか――

ゆっくりと車輪を回して、四人は丘を下った。今度はサチがペダルを漕いで、ナオが後ろに座った。彼女は汗まみれになりながら、空に向かって叫んだ。

「私たち、きっと生き残るわ！　私絶対、生きて伝えることにする」

晴れ晴れとした決意に、ナオは嬉しくなって後ろからぎゅっと抱きついた。

「その意気よ。清野くんのことだから、サチに心移りしないわけない！」

「言いたい放題か。ナオ、道案内は任せたよ」

「もちろん。まっすぐ進め！」

少女たちは笑い合いながら自転車を漕いだ。大きな車輪は夜を抜けて、いつまでもいつまでも回っていく。